

臨床の立場から自己について考える；
清水博著「自己に関する科学的研究」を参考に
対談 大場弘、木村功

大場から木村先生へ

さっそくですが、対談の方をお願いします。前に送りました「自己に関する科学的研究」を材料にその解説的な対談としたいと思っています。

場の研究所の方からマニュアルメディスンの方々に役立つかも知れないということで、この文庫本を勧められました。内容的にかなり洗練されており高度な冊子（哲学書）ですので、この内容の一部だけでもわかりやすく読者に伝えることができればと思っています。ご協力のほどお願いいたします。

木村) 宜しくお願い致します。

確かに清水博先生の「自己に関する科学的研究」は、一読した限り一般にはかなり難解な部類に入ると思いますが、臨床的な意義に即して考えていけば、皆様方にも得るものは多いのではないかと思います。

大場) 勝手に、清水博先生の弟子とさせてもらっていたのですが、こんど、NPO 法人「場の研究所」として立ち上がることになり、私も末席に加わることが許されました。清水先生は東京大学名誉教授で、生命科学者として超一流です。それに、多くの著書によって思想家としてもひろく世に知られています。それに、清水先生を慕って集まってくる方々がとにかくすごい。転換期を迎えているこの社会で、幕末の吉田松陰の塾を連想させます。学会、財界のたいへん偉い先生の下でいろいろと学ぶことが多く、私だけがその恩恵を受けるのも意味がありませんので、マニュアルメディスンの会員の方々にもそうした集まりに出られる機会をつくってあげたいと思っています。

場の研究所は、自分のはたすべき使命を見出すための学問の場ですので、マニュアルメディスンの会員みなさんもぜひ参加していただきたいと思っています。とにかく様々な分野の方々の集まる会が開かれますので、いろんな意味で勉強になると思います。

さて今回の対談ですが、アイデンティティ、自己をテーマに考えてみたいのです

が。とかく我々は日本の社会でアイデンティティを認められていませんし、我々自身、自分が何者なのか自己について考えることこともまずありません。社会に果たすべき私たちの役割を考えると、自己を問うことは大事であろうと思います。また自己と非自己の概念は生命科学でよく話題になりますが、我々の臨床においてもなにか重要な意味がありそうです。この対談でちょっと深く考えてみるきっかけにしたいと思っています。よろしくお願いします。

木村) 清水先生にお会いして本当に立派な方だと思いました。やはり、東大名誉教授ともなると単に学問ができるだけではなく、人間性も必要なのだとつくづく思っております。

清水先生のご提言は多分に哲学的なものでありますが、単なる抽象的なものに終わることなく、実践的な哲学として非常に意義深いものであると思います。大場先生にも今後とも是非清水先生のお考えをマニュアルメディスンの将来に生かすような形で紹介して頂きたいと思う次第です。

さて、アイデンティティとは「自己が環境や時間の変化にかかわらず、連続する同一のものであること。主体性、自己同一性」とされておりますが、日本の社会では主体性よりも協調性が重視されるために認められにくい概念なのかも知れません。

やはり、ここで切り離せないものは「自己」と言うものであると思いますが、これがなかなか一筋縄でいかない代物であります。我々は通常「自己」とは「意識」であると思っておりますし、「意識」なくして「痛み」も感じることはないと思われまます。しかし、「自己」の中には「意識」のみならず、「無意識」も存在しておるはずでです。

有名な画家のパウル・ゴーギャンは晩年「我らは何処より来るや？我らは何者なるや？我らは何処に行くや？」と言う極めて哲学的な絵画を仕上げたそうですが、彼は原始的な絵画を主に描いていたようですので、この問いもまた非常に原初的な問いであるかも知れません。

「自己」と言うものが何者であり、何処から来て何処へ行くのかと言うことは、非常に哲学的な問いであり、これにあまりにもものめり込むのは危険であるとさえ言われております。だからといって、「自己」が何であるかをまるで考えないと言うことは徒手療法を生業とする我々においてはありえないことだと思えます。

まずもって、「自己」が何者であるか以前に、「自己」とはどんなものかを考えていった方がいいのかも知れません。つまり、「自己」とは何をしているのか、その働きをまず探っていくことが重要ではないでしょうか。

大場) 若いときはそもそも自分というものがわからないために自己の確立で悩むわけですが、今から考えてみれば簡単に自己が確立するわけではないようですね。自己を確立するために努力することが人生であるかも知れません。それはまさに脱皮を繰り返しながら、自分というものを鮮明にしてゆくことかも知れません。人生の中で体験することや学ぶことが大きな意味をもってくるようです。

つい最近、自分探しの旅に出ていた若者がイラクに迷い込み、そこでテロリストに無惨にも首を切り取られるという悲惨なできごとがありました。自己の確立ということは、世界の中での自分の位置づけを意味することであるかも知れませんが、周囲の状況を理解し危険を嗅ぎ分けることがどうしてできなかったのでしょうか。平和で安全な暮らしから一転、予測できない社会状況に迷い込んだとしか言い様がありません。

すべからく生き物にとって、自己という世界の中での位置づけは、生存に関わるきわめて重要なことだと思います。何が起こるかわからない厳しい自然環境の中で生き抜くために備わった生物のはたらきでしょうね。人間である私たちにはとっては、まさに「私（わたし）」という主体性をもたらす心の原点ではないでしょうか。自分の原点を見失っていると、周囲の状況に翻弄されっぱなしになってしまい、何事もうまくいきません。心も身体も、おかしくなることさえあるでしょうね。

木村) まったく、そのとおりだと思います。現代社会では「自分」を見失ってしまう人も多いということでしょうか。うつ病などがクローズアップされるのも、そういう側面があるのかも知れません。おそらく、「本能」に依存する部分では明確な「自己」があると考えられるのですが、これが一旦「理性」的になり、現実社会の中での人としての役割と言うものになると、途端に曖昧になってしまうような気がします。ご指摘のように自分の原点を見失ってしまっているような患者さんには、痛みを訴えることでしか主体性を主張できないような方がおられますが、まさに周囲に翻弄されて心身ともに疲れ果ててしまっている典型だと言え

るかも知れません。

我々は「自己」と言うか「自分」と言うものが確固たる形であると思いがちですが、特に精神的な意味では、何もしないで「自己」が勝手に存在しているわけではないと思います。つまり、これが「自分」だと言えるような行動があってこそ、はじめて「自己」と呼べるものが出てくるのではないのでしょうか。この時、「一体、自分は何がしたいのか？」などと考えることにより、社会の中での自分の位置づけが分からなくなってしまうのではないかと思います。そうではなく、先生のおっしゃるように何が起るか分からない自然環境の中で生き抜くためと言う主体性として「今、自分は何ができるのか？」とか、「現状で自分のすべきことは何なのか？」とか言うような考え方の方が重要だと言えるのかも知れません。

大場) 主体的な行動をどうとるかに自己の存在があるわけですね。まさに自由意志を発する自己と言えるようですね。自由意志は理性的な精神が発していると思ってしまうのですが、ところがそうではなく、心で意識する前に脳の深いところで行動を引き起こすさまざまな準備がなされているということが明らかになり、無意識のところですでに行動を引き起こす決断がなされているようですね。自己というのは、木村先生がおっしゃるとおり、理性的なものではなさそうです。それでは人間としての自由意志はないのかとなりますが、自分の行動を制することにおいて理性的な自由意志の発動があると本にありました（ユーザーイリュージョン意識の幻想；紀伊国屋出版）。

木村) ユーザーイリュージョンで紹介されているリベットの実験では、意識は現実がおこった後 0.5 秒後に自覚構築され、0.3 秒さかのぼって現実の中の自分を認識するわけですが、意識自体は肉体的・非言語的な無意識における「自分」が自己を意識することで生じる「私」と言う一つのシュミレーションであるとされており、しかも、無意識レベルには毎秒 1100 万ビットもの情報が入力されますが、そのほとんどを捨てて 50 ビットくらいの情報で現実を簡略化、或いは圧縮して認識するようです。

しかしながら、優れたアーティストやスポーツマンは修練によって、ある種のトランス状態のようなところに自分をおくことによって、無意識そのものが自身を制御することにより意識によって生じる 0.5 秒の遅れを帳消しにするようです。

つまり、「私」と言うものを意識しない状態でこそ、多くの情報を一時に処理する能力が発揮されるということもできますが、このような状態に自分を練り上げるのは、結局意識による誘導が不可欠であり、まさに自分の行動を制することによって理性的な自由意志が発動されると言えると思います。これから言えることの一つは、意識は肉体を分離できないということでもあります。心身相即であって始めて我々は十二分な仕事ができると言えるのではないのでしょうか。

大場) 主体的な行動のなかに自己が反映しているとも言えるかも知れませんが、いわば社会での自己表現でもあるわけですね。さまざまな状況の中で為される身体的な行動すなわち行為そのものが自己となって表れているということでしょうね。そうしますと、外に向かってのはたらきかけ、外の世界との関わり合いによって自己が発揮されることになります。木村先生より先に難しいことを言うてしまうようで恐縮なのですが、外と内とが混じり合う境界に自己が表れるように思えます。もっとも、ほとんど清水博先生から学んだことですが。清水先生が遠間の世界と近間の世界の境界ということをよく強調されます。遠間とはいわば言葉や文字でコミュニケーションをとるシンボリックな世界です。一方、近間の世界となりますと、通じ合うためにむしろ言葉はいらない関係、すなわち言葉では伝えられない身体情報のやりとりが成り立つ関係です。読解力のカギは文字の行間にある作者の伝えたい気持ちをつかむことだと、受験生のうちの子供に話すのですがなかなか通じません。まさに他人事、私は遠間の世界の住人のようです。子供はまだいいとしても妻とは完全に遠間の関係かも知れません。夫婦とは言葉がなくとも通じ合える間柄と思っていたのですが、どうも間違いみたいです。

清水博先生と話す機会ができて、それに清水先生の本（生命知の場の論理；柳生新陰流に見る共創の理、中公新書）に啓発されて剣術を始めたのですが、身体情報のやりとりがどんなものなのか実感したくて今、剣術の稽古に励んでいます。相手の間の中に不用意に入ってしまうと切られてしまいますので、相手との境界に先（せん）をとって自分の間をひろげる絶妙なタイミングに醍醐味を感じ始めています。もっともまだ一年も満たない素人が、何十年も続けている先輩の掌で踊らされているわけですが。

自己中心的な時空間と、眼前に広がる世界としての場所が入り交じった境界は自他非分離な領域になるのでしょうか。治療台の上でまさにリラックスした状態に

なっている患者さんとは、皮膚を通して自他非分離の境界領域をかたちづくっています。自慢でも何でもないので、身体呼吸療法では、どんどん深くその領域を深めていくことができます。精神疾患の患者さんの施術を得意にしている伊澤勝典先生のように、患者さんの心の世界と自然に溶け込むことができる先生もいます。研修会で伊澤先生が、統合失調症の患者さんを施術しているビデオを見せてくれました。この患者さん治療でかなり良くなっている（正しくは寛解してきたと言うらしいのですが）、ビデオを通して患者さんの眼を見てみると、見ている私自信が鳩尾あたりで何か息苦しくなってくるのです。どうも患者さんの左右の眼が正しく一点に注視されていないような感覚なのですが、あれでは視覚的な世界が歪んで認知されているのではないかと思えました。空間識がおかしいかも知れません。話が逸れてしまってすみません。

木村) ここで一つ重要なことは、意識というものは環境があってこそ生じ、行為があってこそ意味があるという点です。清水先生の遠間の世界・近間の世界と言うものは、意識及び無意識と言うものがあくまで相対的に存在するものであることの有様に関する説明であろうかと思われます。

私たちもこのように対談と言う形で、言わば遠間の世界でのコミュニケーションを行っておるわけですが、例えば一人の患者さんを二人の術者がほぼ同時に診る場合、いちいち患者さんの状態を言語化しなくても充分コミュニケーションは可能であると思われます。意識化された言葉と言うものは情報量を大幅に削減、或いは圧縮しておりますので、それを取り戻し展開するためには受け手の側もそれなりの情報を既に持っていることが必要となります。

文章を読解することもそうですが、武術などで相手と対峙する場合も同様であると言えます。相手の攻撃を見切ることができない場合、まともに受け止めるしか方法がありませんので、いわゆる「居つく」ということになってしまいます。この時に相手の動きすら読めない場合は、こちらはいつ息を吐いていいものか分からず、かなり体力があったとしてもじきに息が上がってしまうものです。しかし、ある程度の高齢であっても情報を十分に持っている達人クラスでは、このような事態にはなりません。もともと、武術と言うものはいかに力を使わず効率よく相手を倒すかと言うことを模索してきたものでありますので、体力のみがすべてではないということでしょうか。

精神疾患のある患者さんの場合、この武術に置換えると更に分かりやすいかも知れません。もし、狂人を相手にする場合、まったく出方が分からないとも言えます。通常のセオリーは無視されて攻撃されることになるでしょう。これは先生のおっしゃるように空間識自体もおかしいからかも知れません。

身体呼吸療法は、この意味では術者にとって危険な部分もあるかもしれないと思われます。伊澤先生のように天性でそういう防御能力を持っている方はよろしいのですが、歪んだ心の世界に溶け込んでしまうことは、それなりにリスクがあると考えることが必要ではないでしょうか。もっとも、身体呼吸療法を学んだ先生方であれば、一種独特の違和感を感じることに優れていると思われますので、いきなり深追いしなければ大丈夫ではないかと思われます。

大場) 確かに相手との境界に入っていくことで患者さんの苦痛が、自分の身体に映されることがあり、自分自身きつい不調が続くことが稀に起こります。私自身の経験では慢性的に疲労が蓄積して、免疫的な力が低下しているときに起きやすいように感じています。こんなときというのは、身体的なところでの自己が薄らいでいるとでも言いましょうか、自分自身の身体を統合する神経的なはたらきが不安定なときなのでしょうね。そう意味でも自己とは多分に身体的な基盤が大きいように思えます。

そして木村先生が指摘されたように、知らずに蓄積されている身体情報のバックアップも重要なことなのでしょうね。武術でも何でも、どんなときでも無意識のうちに予測がはたらいて動いていますね。ですからどう出るかわからない子供の動きというのは、たとえば車を運転しているときなんか怖いものがあります。

先ほどの私の話の続きになりますが、意識的にも無意識的にも自己意識とは自己を主張することであり、自己中心的に世界を見る意識の志向性ということになるのでしょうか。自己を中心にした世界へのはたらきかけです。

自己感が弱いということは、自分のことがよくわからず、自己を守る防衛的な意識が弱いということになるでしょう。そのために他人の感情や都合に振り回され、ストレスをためやすく、自分自身を傷つきやすくしてしまいます。あるいは、なにごとにも繊細で非常に感受性の高い人というのも傷つきやすい。逆に自己意識が強すぎると他人の領域にずかずか侵入していくことになりますので、周りからかえって嫌われることになりますが。

自己をしっかり確立されるためには、自分自身の身体的な表象（イメージ）がきちんと神経系に形成されることが大事ということになるかと思います。原点としての自分自身となりますと安定した存在である必要がありますし、その意味で、安定して統合された身体の表象が形成されることは、自己を確立するうえでとても大事でしょうね。自己のイメージと言ってもはっきりしたイメージ像があるわけではなく、自分という存在（私）がはっきりと認識できる自己感、そんな漠然としたものかなと思うのですが、それでも無意識のところではしっかりとした神経的な表象があるということだと思います。それじゃ、子供の時にからだが弱かったことか、あまり運動しなかった子はどうなんだと訊かれると、よくわかりませんが・・・親に抱かれたり、身体的な接触が十分あれば、自分自身の身体表象がきちんと形成されることになるのでしょうし、それに幼児の時の砂場遊びのようなあそびで学ぶ社会性ということも重要でしょうね。

木村) 患者さんの状態に自分が左右されると言うのは、清水先生の「自己の卵モデル」と「場の共有」を思い出させますね。免疫力の低下と言うのも、興味深いです。免疫能は言わば「自己」と「非自己」を区分するものですから、その低下が実は肉体的な「自己」の維持の低下につながっているのかも知れません。免疫と言えば「自己言及性」とか「自己冗長性」とか言うものが特徴的ですが、これは「自己」とはこういうものと言う形で「非自己」である他の蛋白質を排除するのではなく、これは「自己」ではないと言う積み重ねで「非自己」を排除すると言われております。よくいうリウマチ気質の人なども頑固であったり、強情であったりするようですが、こういうものが「自己」さえも否定するということになるのかも知れません。

このような意味では、自己中心的な世界を見る意識の志向性と言うものは、あくまで世界に対する働きかけによって自己が創出され、自己を中心とした世界は世界自体から作られるとも言えると思います。この中であまりにも自己をかたくなにしたり、また自己が脆弱であったりすれば、結局世界に対して自己を存続させることが困難になるのかも知れません。

かつては「健全なる精神は、健全なる肉体に宿る。」と言われ、私なんかもそれに反発して「じゃあ、病人はみんな不健全な精神の持ち主か？」とか思ったりしたのですが、これは「健全なる精神は、肉体と脳との健全なる連携が確立され

ることにより、宿る。」とした方がいいのかも知れませんね。

意識は情報を大幅に削減しますので、その削減の仕方と言うものを考えた時、幼児期からの経験と言いましょか、そういう精神の発育が重要な意味を持つと考えられます。どうでもいいようなこと、或いはどうしようのないことに拘ったりするのが「人間の性」と言うものですが、やはり俯瞰的視点（ふかんできしてん；俯瞰と言うのは高いところから見下ろして眺めること。非常に客観性の高い視点）から、より重要なことや現実にかできる部分を考えてゆくようにするべきであるのは言うまでもないことです。患者さんにもこのような視点でものを考えられるように指導できればいいのですが、なかなか難しいですね。

やはり、こういう意味でも「自己」の確立と言う点では、幼児期の接触によって経験される「距離感」の様なもの、とても大切であると思います。自分の痛みと他人の痛みが同じものであると言うような経験など必要でしょうし、単なる器質的問題だけでない痛み・・・世界疼痛学会の痛みの定義にもあるように「不快な、感覚、情動体験」としての痛みなどは、「自己」と言うものの働きを無視して考察できないもののように思われます。

大場）今回テーマにさせてもらった自己のアイデンティティ、同一性と言いますか、身体と周囲の空間的な位置づけだけでなく時間的にも永續する一貫性がないと周囲から認められることになりません。一貫した考え方で活動が続けた経歴が不可欠です。これまでの雑誌の蓄積とか活動記録なんか見ますと、マニュアルメディスンもがんばってきたという印象がありますが、でもなんだか外に対しての積極的な姿勢はたらきかけが弱い。存在感が薄いという印象になりますね。社会的な活動の場が必要なんですね。

ところで木村先生が清水先生の卵モデルということを出しましたが、読者のみなさんはほとんど知らないと思いますので、簡単に述べておきたいと思います。

清水博先生の「場の思想」の核心は、個々の局在的な生命は世界（自然）から分離したものではなく、時間的に空間的に限りなくひろがる遍在的な生命が個々にその姿をあらわしているという考えだと思っていますが、個々の局在的な核の部分を卵の黄身に喩えれば、卵の白身は遍在的な生命がそれに局所的な場を与えている領域ということです。白身が黄身を包み込んでいるすがたは、局在的な生命と遍在的な生命の相補的な成り立ちを示しているわけです。核となっている自己

中心的な領域があり、それを生命場としての「場」的領域が包んでいるという説明になるでしょうか。自己とは個性を自己表現することですが、それが全体と調和することで本来の役割をはたすことができるわけで、個性（多様性）と秩序が内包されるモデルです。

自己中心的なふるまいはまったく自由で多様な可能性をもっていますが、場的な領域は他者と一緒に協働して何かを創出してゆくふるまいをします。舞台の上の役者が即興的に協力し合って物語を創りだしてゆくようなことです（前号、特集号を参照してください）。一個の細胞で喩えれば、核とそれを取り囲む細胞質になります。細胞質は隣接する細胞同士が場の情報によって密な関係を取り合い、同一の組織として働き合います。また遠く離れた細胞との間ではホルモンや神経伝達によってもたらされるいわばシンボリックな情報交換によって全身の生命活動が円滑に営めるように貢献しています。細胞質は近間の世界と遠間の世界と関係し合う「場」になっています。場はこのようにさまざまな関係が重なり合っています。考えてみますと、場を通して他者と非分離な関係になれるので、身体に接触する治療は新たな場の情報を他者との間で創出していることになります。

この卵モデルから連想してみますと、自己から発すると思われる意識というのは自由に拡がりをもつことができる領域だと思うのです。瞑想すると、気持ちを地球の中心に届くように深く地下に下ろすようにできます。私たちもときには遙か遠くの宇宙まで意識を広げるような気持ちになることもあります。誰でもそうした主体的な感覚をもつことは事実です。実際に意識が遙か遠くに達しているということよりも、そうした感覚（主体的体験）を持つことができるということの方が重要なことです。意識の志向性です。逆に自分自身に向けて志向する感覚もあるわけです。したがって、事実としてあるのはこの意識が志向するはたらきです。生物学的な言い方をすれば、注意が向くということから、これまで蓄えられてきたさまざまな感覚がそれに対応して喚起されることになります。意識がおよぶ場所的世界とは、脳内で再現される意味空間ということにもなるでしょう。しかし単に幻想と片づけられる以上に、リアリティ（現実感）をもつわけですから、主体（自己）と客体（対象）という図式からはみえてこないことがありそうです。まさにこれらを包括する場が背景にあります。内（自己）も外もない場的領域ですね。この場的領域を広げてゆくことにより、世界をさらに鮮明に深く認識してゆくことになると思います。

剣術を通して考えてみますと、剣先（切先）に意識がないことを“はたらきがない”と注意されます。この切っ先に研ぎ澄まされた感覚がおよぶということ事態、不思議なことです。剣を持つ筋感覚がそうした感覚をつくっていくと考えると納得がいきます。切っ先がもたらす慣性モーメントを感じ取っていることだと思います。難しいのは自分の剣の切っ先と相手との距離感があります。それに相手の切っ先との距離感もありますので、相手との間合いをはかることの難しさを体験するわけです。こうなりますと筋感覚だけではありません、皮膚感覚も重要になってくるでしょうね。相手の切っ先が飛んでくるときの風が妙に鮮烈に感じられます。距離が離れていますと空間識とか、表情から相手の動きを読みとるなど、視覚的なことが意味をもってきますし、目に見えないところでは聴覚がものをいうでしょうね。さらに場的に不気味さを感じたりすると、第六感がありますが、これは内臓感覚でしょうね。幼児がさかんに物を嘗めます時期がありますが、この内臓感覚を身につけているのでしょうか。味覚と言うよりは、粘膜的な化学受容器的な感覚です。このようなさまざまな感覚が自分の場所的な領域を広げてくれると思うのです。

清水先生は、自己には相補的に働く二つの領域があると言います。自己の内部に世界をマッピングする領域すなわち外界を映すはたらきと、外界が映されている自己を認識する大脳皮質のはたらきです。前者は大脳辺縁系から下の脳においての主客非分離なはたらき、後者は世界と自己を分節化する皮質のはたらきになります。主客非分離な感覚的表象から意味的な構造が意識化されていくわけです。意味的な世界がつくられるためには、生物の進化学的な遺産の上に、経験や学習が必要になっているということです。

勝手に拡大解釈しているところがありますので、間違っていたら指摘してください。

木村) 清水先生の卵モデルの説明ありがとうございます。拡大解釈とおっしゃっておられますが、応用的な意味ある解釈であると思います。しかし、言葉にすると、やはり難しい概念ですね。端的には卵の白身＝社会的自己（環境の中の自己）、卵の黄身＝個的自己（自分の中の自己）と言うところでしょうか。この時の局在的な生命と遍在的な生命と言うのは人体に置き換えた場合、それぞれの細胞が局在的な生命であるとすれば、人体のもつ恒常性やイネイト（叡知）が遍在的な生

命と言えらると思ひます。これを社会的、宇宙的に拡張して考へていこうというこゝとでしうか。自己が自己であるためには、やはり作動と言ひましようか行動が必要ですので、それに一貫性がなければ「自己」は非常にあやふやなものになつてしまふと思はれます。結局、われわれの認識する世界というものは、脳がつくり出した世界であるわけですので、意識されるということ、はじめて意味が与えらるると考へることもできます。

武術というものは、ある意味とことん自分を追いつめ、自己と向き合うものであるとも言えますが、そういう自己と徹底的に向き合うことも、主体と客体を明瞭化するためには非常に重要なことと思はれます。徒手療法においても、そのような自己と向き合う訓練は無駄にはならないでしう。やはり、治そうと言ふ明確な自己があつてはじめて患者さんも呼応してくれるはずです。その意味では、先生のおっしゃる皮膚感覚や聴覚、内臓感覚と言ふものを鍛へることも大切でしうね。特に内臓感覚は、第二の脳と言はれるくらい生存に関して大きな意味を持っていると思はれ、単に自己の生存だけでなく、他者との関りにおいてもストレスで内臓の異常を訴へる患者さんも多いわけですので、治療家自体もなんとなく腹で分かると言ふような部分があつても不思議ではないと思ひます。

武術ではいわゆる下丹田（下腹部）・中丹田（胸骨上、両乳頭間）・上丹田（眉間）の三つを使い分けますが、これは力のだし方の言ふ意味でも重要ですが、相手を感じると言ふ部分も大きいものであると思ひます。気功や中国武術には「小周天」と言ふものがありますが、「周天」とは古代の天文学用語で天体上の円周、つまり黄道のことを言ひます。要するに古代中国では人体を小宇宙として捉へていたと言ふことです。「周天」には「大周天」と「小周天」がありますが、「小周天」は人体の中の気が任脈（陰）・督脈（陽）をめぐつて周回することを指し、この中の「気海＝下丹田」・「だん中＝中丹田」・「印堂＝上丹田」は、特に重要な部位であると思ひます。小周天法を行う時には下を上顎の歯の付け根に当てることになっておりますが、これは任脈と督脈をより密接につなげるためであるとされております。つまり、任脈・督脈ともに会陰部から起始しますが、督脈は上口蓋上前歯の付け根で停止し、任脈は舌の先端で停止しますので、丁度スイッチのようにこれを繋ぐことで気が循環するよくなると思はれておるわけです。これは内的感覚を安定するためには大切なことであらうと思ひます。舌および歯は感覚的に非常に鋭敏ですので、味覚の低下や虫歯などがあると触診時の感覚にも

影響を与えるかも知れません。いろいろな意味でこれらは重要であると思われませんが、やはり情報がたくさん入ってくる部分であれば、異常があることにより過剰な情報が脳に入るのは好ましくないこともあるでしょうし、できるだけ安定させておきたい部分ではあると思います。これは咬合の関係から考えても重要な部分ですので、患者・術者を問わず、確認しておいた方がいい部分でしょう。

また、TMJなども含めた場合、頭蓋下部と言いますか、いわゆる顔面骨、おそらく咽頭部あたりまでは「自己」という意味ではおおきな比重を占めているように思われます。頭蓋骨調整となると、どうしても脳蓋骨を中心に考えがちですが、顔面骨を骨としてではなく、軟部組織と一体になった構造体としてみると、その状態がかなり精神状態と関係しているように思われます。

「自己の同一性」ということを考えた時、単に形而上学的な部分でのみ語ってしまうと「自己」の本質が捉えられなくなってしまうと思いますし、かといってあまりに現実レベルのみにこだわってしまうのも「自己」を見失う可能性が高いように思われます。カイロプラクティックが哲学にこだわるということも、カイロプラクティックの本質を見失わないようにするためであろうと思うわけです。

大場) カイロプラクティック哲学と言え、私の個人的な身体観ですが、身体は7割が水でゲル状のかたまりのようなもので、木村先生が指摘されたようなところで部分的に硬くなっていることがあり、これは表現を変えれば身体を構成している粒子の密度の濃淡があって密度が非常に高くなって硬くなっているとでも喻えられるかも知れません。それぞれの粒子に自由度があって浮遊感があれば、間隙を通り抜けるような風通りの良いすがすがしい印象をもてるのですが、閉めきった家のようにどんよりと空気が重く沈んでいる閉塞した状態では家はもちろんのこと、身体にしても閉塞した感じでは具合が悪いはず。粒子は見方を変えれば波動ですから、波動を通すように意識をはたらかすと、粒子の自由度は高まります。身体の開放された場において、宇宙の叡知が自由に通り抜けられるように軽やかな波動を促すことが必要だと思っています。私はこのようすがすがしい透明感のある身体の呼吸をとくに場の呼吸と呼んでいます。神経系が新鮮な気を呼吸しているような感じです。

科学は物の豊かさをもたらしてくれましたが、一方では失ったものの大きさも計り知れないことを実感しつつあります。科学を万能と見なす時代が去りつつあり、

次の時代のための精神的な支えが必要とされています。その意味で清水先生の場の思想は、我々にとってもこれからの時代をリードする哲学としてたいへん意義深い。ぜひ、「場の思想」を読んでもらえたらと思っています。

今の時代は、これまでのモノを中心にした考え方から、確実にコト的な考え方にかわりつつあるように思えます。たとえば我々の世界では“骨がずれている”と言ったこれまでのモノ的な見方から、骨格構造の歪みをもたらしているその意味を探る方向に見方がかわってきています。運動学とか神経学とか見方が複雑になっていくと、その意味深さにただ驚かされるわけですが、ただどんなに複雑になっていっても、変わらないことがあります。それは身体の異常には意味があり、身体自身（自己）が自分自身で気づきなおすことで自己組織化しなおすことができるということです。我々の役割は、閉塞したところに開放された場的な領域を提供し、フィードバック的な気づきを与えることだと考えます。カイロプラクティック哲学で言うところの先天的な知性に委ねるということです。東洋で言われる「気」ということも、身体のモノ的な流れを促すことができる、自然の必然的なはたらきでしょう。

木村) 確かにそのとおりだと思います。矛盾や葛藤をなくしていくのが科学ですから、矛盾や葛藤だらけの人間社会や人生自体の幸せと言う点では、科学だけでは豊かになりえないように思われます。やはり、重要なものはコミュニケーションを通じて作られるそれぞれの個人における「自己」とその確立ではないでしょうか。その意味では清水先生のなさっていることは非常に重要なことであると思われます。

自己組織化と言う観点は、まさにイネイト・インテリジェンス（先天的な叡知）そのものであるかも知れません。脳科学の発展に伴い、身体性と言うものを抜きに脳が存在できないことが分かってきたと思います。われわれの治療と言うものは、やはり身体の統合性に関する部分にアプローチしていると思いますので、当然、脳神経系を抜きに語ることはできませんが、今後更にその内実が複雑になっていくように思われます。しかし、人間の身体に法則性があるのであれば、必ずしも難しいばかりのものではないと思われます。ただ、言語的に理論化するにおいてはなかなか難しい部分があると思われ、やはり各治療者個人個人の経験の蓄積と切磋琢磨が重要であるでしょう。その意味では、いろいろな考えを取り入れて、

或いは直接的に意味があるのかと思われるようなものでも、それが人間関係に関するものであれば何らかのかたちで治療者自身を高めてくれるのではないかと思います。治療家に必要なものは確かに人体に対する豊富な知識やテクニックもありますが、人間性を磨くことも大切であると思いますし、そのためには自分と異なる意見や異なる業種の方法論などもどんどん吸収して、弁証、つまり正反合してより充実した見識をもつように努力したいものです。

大場) 最後に今回のテーマを総括しますと、「自己とは生命の生き（はたらき）」と清水先生流にまとめられるかと思いますが、この生き（はたらき）は実際に臨床ではどのように捉えることができるのか、私なりに思うところがあります。一つの例は、皮膚から伝わる動きの気配です。これは理学療法士の山本尚司先生が私の身体呼吸から掴んだことだと言うのですが、たとえば腕に軽く触れていると、実際の腕はまっすぐになっているにもかかわらず前腕がある方向へ捻れに似た動きの癖が感じられ、それを皮膚と筋膜で調整すると症状が良くなると話してくれたことがありました。確かに、そのように意識をはたらかせてみると動きの方向性が感覚的にみえてくるのです。また、伝統的に筋膜療法を受け継いでいらっしゃる大谷周作先生のお話を聴くことがありました。身体の各部の動きの軌道を正しくすることで身体的な症状を解決してゆくことができるということで、皮膚からその軌道を正すように軽く皮膚に指を走らすように正しい動きを促すと実際に動きがガラリと変わるのです。大谷周作先生には、瞬間的に全身の動きの不都合さを見て取っているようです。このように、皮膚とか筋膜への刺激を通して習慣的に身に付いた動きの癖を神経的に修正させることができる事実から、無意識の動きの気配は皮膚と筋膜に表れていると考えることができるでしょう。この動きの気配は、自己のはたらきの表れと言えるのではないのでしょうか。もう一つの例は身体呼吸の観察から言えることなのですが、感情的な心模様が身体の呼吸に表れるということです。悲しいことがあった患者さんでは心臓のすぐ下方で硬くなっていることがありますし、鳩尾深く緊張があるときは不安やストレスをもっています。このように身体内部の呼吸の動向から実にいろいろなことがみえてきます。これも自己のはたらきの具体的な例だと思うのです。自己中心的な過剰なはたらきは身体に硬く表現されるようです。まさに卵モデルにおける黄身（自己中心的領域）が硬くなっていると言えるでしょう。治療では、場的領域である白身

を通して緩解させることができると考えています。

最後に結びとさせていただきますが、我々からすれば、「身体はモノじゃない。生命の活きを表現している」と言えるでしょうね。

木村) まだ、不完全燃焼な部分もありますので、また機会があれば宜しく願います。ありがとうございました。

大場) 今回は私が一方的に話を進めてしまって、木村先生には不完全燃焼に終わってしまったようで…。また、ぜひ願います。

NPO 法人「場の研究所」

日本の若者に広がる空虚感、アイデンティティを見失った日本人の精神、硬直しきった社会・・・、今求められているのはこの社会の危機を救う新たな思想です。日本に初めて日本固有の無の哲学を築いたと云われる西田幾多郎、これまで彼の形而上学的な原理を乗り越えるために多くの哲学者が輩出してきましたが、いまだ無の哲学はその真価を解き放すまではいたっていません。清水博先生は、人類・社会救済の大悲願をもって「場の思想」を啓示されました。まさに日本の哲学がここに開花するようであります。「生命（いのち）は場に映り、場は生命の表現である」と語られたように、場と生命が結びつくにいたりました。これは我々にとっては、ケアの本質に関わることであり、私たちの存在（アイデンティティ）と使命を鮮明にすることになるでしょう。このとき私たちの仕事の価値が、これからの世の中にいかに意義あるものかを明示してくれるものです。一人でも多くの先生方が、御自身の人生の価値を見出していただければと願うしだいです。

場の研究所発行の文庫本についての紹介；これまで3冊発行されています。

Vol. 1 「転換期を生きる君へ」

先の見えない混沌とした時代を迎え、いかに未来を切り拓いてゆくか、いかに生きるべきか、終戦の日から体験した激動の時代に青春時代を過ごした清水博先生が決断した生き方がとても感動的です。極限まで自分を追い込んだ孤独に耐えて見出した光明とは・・・。

無限定な時代への新たな出発の原点は、「なにを為すべきか」「自分は社会になにができるか」

るか」という自問から始まります。若いだけでなく一般人にも読んで欲しい一冊です。

Vol. 2 「バイオホロニクスに出会うまで；なぜ情報を研究するのか」

Vol. 3 「自己に関する科学的研究」

（購入希望の方は、マニュアルメディスン研究会事務局まで、各一冊 1000 円；送 160 円）

清水博先生と、場の研究所の副代表をつとめる清水義晴氏との対談、「新しい場の創造による変革のドラマづくり」（博進堂文庫¥500）は、場について実践的な考え方がすぐにわかる小冊子です。読んでいただきたい一冊としてお勧めです。

（株）博進堂 新潟市木工新町 378 の 2 Tel. 025-274-7755

（マニュアルメディスン研究会にお申し込みいただいても結構です。）